

令和 4 年 9 月 5 日現在

機関番号：25403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K18269

研究課題名（和文）外傷記憶の再演をめぐる1980年代以降の芸術の理論・実践研究

研究課題名（英文）Reenactment of Traumatic Memory in the arts after 1980

研究代表者

石谷 治寛 (Ishitani, Haruhiro)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：70411311

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1980年代以降の芸術実践に見られる外傷記憶の再演を考察した。1980年代のエイズ危機に直面して、公共空間において個人の病の表明や犠牲者の喪が芸術実践の中心になっていった。その京都での展開について写真や映像をデジタル化し、公開する展示企画を行った。資料展示は記憶を再演するための共有空間として働いた。

さらに過去の写真を描き直す芸術やドクメンタ14といった国際芸術展を調査した。記憶の引き金となる資料展示やパフォーマンスによる外傷の再演を通して、個人の情動を通して集合的記憶が再編される。そうした主題は自然環境の喪失や他者としての動物との関係にも広げられて問い直されるようになっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1980年代以降の芸術実践には外傷記憶の再演を促す芸術実践が多くみられるが、これまで十分に理論的な考察がなされてこなかった。本研究ではとりわけ1980年代のエイズ危機と1990年代の京都での展開について具体的な資料整理や聞き取りを通して、展示企画を行うことができ、クラブカルチャーと芸術実践の接点やセクシュアル・マイノリティの立場に立つ芸術運動など、これまで十分に歴史化されていなかった活動を資料とともに具体的に提示することができた。東京と京都での展示はきわめて多くの当事者や新しい観客に当時の歴史を振り返る機会をもたらすことができた。さらにその活動を再評価するための歴史的・理論的視座を得た。

研究成果の概要（英文）：This study examined the reenactment of traumatic memory in artistic practice since the 1980s. In the face of the AIDS crisis of the 1980s, the expression of personal illness and the mourning of victims became central themes in artistic practice in public spaces. We planned an exhibition that digitized photographs and videos of the AIDS activism in Kyoto and made them available to the public. The exhibition worked as a shared space for reenacting traumatic memories. I also investigated the art of redrawing past photographs and international art exhibitions such as Documenta 14. Through the exhibition of archival materials and performances that trigger memory, collective memory is reorganized through individual emotions. Such themes are reexamined in relation to the loss of the natural environment and the relationship with animals as others.

研究分野：美学・芸術理論

キーワード：再演（リエナクトメント） 外傷記憶（トラウマ） HIV/AIDS アート・アクティビズム クラブカルチャー アーカイブ パフォーマンス メディア芸術

1. 研究開始当初の背景

心的外傷への関心の飛躍の高まりは、1980年代以降に PTSD (外傷後ストレス障害) をめぐる臨床心理学や精神分析学や神経科学の発展によって現代的な課題となった。1990年代からハル・フォスター、ジル・ベネット、グリゼルダ・ポロックといった批評家・美術史家たちが外傷と芸術をめぐってさまざまな角度で芸術批評を行っている。またジャック・デリダをはじめとしてジュディス・バトラーやカトリーヌ・マラーブなどは外傷論を再解釈することで現代的な哲学を練り上げた。さまざまなアーティストも写真イメージを絵画に重ね書きしたり、資料のドキュメンテーションやアーカイブ化の方法から、メディアアート、参加芸術まで幅広い表現方法によって個人的・歴史的外傷記憶を扱う芸術の実践が行われている。申請者は、上記の研究を踏まえながら、科学研究費若手研究 B の研究課題「視覚芸術におけるトラウマと心理ケア 芸術と臨床の連携に向けた歴史研究と理論構築」(H.24~H.27)において、20世紀初頭に戦争神経症やシェルショックと呼ばれた心理学・精神分析学の概念の形成と同時に、新興の映像メディアでトラウマが表現された歴史に注目した。さらに、心的外傷や歴史的トラウマを主題に据えた現代アート、キュレーションの実践、芸術理論まで、総合的なトラウマと芸術史の研究を行った。外傷記憶を視覚表現で再構築し、それを美的に感受できるようにすることは、個人の記憶をケアし、集合的記憶として公共化され得ることを明らかにした。ここではジグムント・フロイトの精神分析学に由来する芸術療法の理論と歴史やジャック・ラカンの理論の検証だけでなく、チャールズ・S・パールのゲシュタルト心理学やフランスの精神分析家ピエール・フェディダによる精神分析学と芸術論、ドナルド・ウィニコット、ハリー・ハロウ、ダニエル・スターンらの幼児の発達心理学からの芸術実践への貢献が指摘される。申請者は、かつて博士論文で19世紀の自動症の概念に由来する美学と芸術の創造性に注目したが、その後の研究によって、芸術と心理学の並行関係を、現代にまで広げて考察を続けている。

2. 研究の目的

1980年代以降に制作されるようになった外傷記憶を扱う内外でのメディア芸術の実践を、その時期に飛躍的に高まった PTSD への関心の広がりとその臨床論(神経科学、精神分析学、臨床心理学)や記憶研究の知見を通して理論化する。パフォーマンスや参加をともなう芸術は、外傷記憶の再演という観点で独創的な考察ができる。主にフランス出身のアーティストたちの作品と日本のメディアアート集団ダムタイプのまわりで展開した実践を軸に、そこから内外の芸術実践の比較・参照へと広げ、現代芸術の理論を練り上げる。

こうした試みを、芸術による外傷記憶の実演化(エナクトメント)と呼ぶことができる。「エナクトメント」という概念は「実演化」を意味するが、近年、従来の精神分析学の成果に神経科学の知見も取り入れた関係性精神分析学の臨床論においてキー概念になっている。つまりセラピストとクライアントのあいだで非明示的に表れる言葉や身振りのニュアンスの間主観的なやりとりのなかに、外傷を抱えるクライアントの解離された記憶が実演化される。このことは、心身の回復が促されるクリエイティブなプロセスとして捉えられる。この考えを敷衍して、芸術実践は、個々の記録の総体であるアーカイブを、再演、つまりエナクトメント(実演化)する行為だとみなすことができる。こうした観点から、近年世界で活躍しているメディアアートの試み、とりわけフランス出身のピエール・ユイグやドミニク・ゴンザレス=フォレストルなどによる過去の映画や演劇の再演を通して、生態系や歴史を再演するビデオ作品やインスタレーションをも捉えられる。彼らの作品について、ニコラ・プリオーらは「関係性の美学」や参加という観点から論じたが、そうした芸術史の文脈だけでなく、外傷記憶の再演という観点から捉え直すことができるはずである。アーカイブ的な歴史の出来事を素材にその再演がなされるとき、そこには出来事が反復されつつも、意識化されない記憶間違いやズレが含まれる。その意識できない差異が、ビデオや作品を通して鑑賞者に非明示的に触知されるとき、関係性精神分析学で言う外傷の「実演化=エナクトメント」が、作品と鑑賞者のあいだで生じているとみなせるだろう。このような日本でも紹介されている現代アーティストの作例を考察も含めて、外傷記憶と芸術をめぐる今日の実践の理論構築に努める。

3. 研究の方法

ダムタイプから派生する日本のアーティストたちの活動は、ピエール・ユイグらのフランスの作家の事例とも共通した傾向が見られる。両者がパフォーマンスや映像を通して、場に介入したり新たな空間を構築したり記憶を再演するという点においてである。両国のアーティストの並行性にも注意を払いながら、1980年代以降の状況に介入する芸術から外傷記憶の再演へという国際的な潮流について明らかにすることが本研究の特徴である。そのために申請者は、これまでの資料収集と研究で得られた知見、国内での臨床心理学者やアーカイブ組織のネットワークを活かしたうえで、それを国際的な研究動向へと展開することができる。1980-90年代のエイズ禍の

時代の芸術とトラウマや喪の作業について研究を進める。この調査ではメンバーをエイズで亡くしたダムタイプ周辺の芸術活動のアーカイブ化を旧メンバー鍵田いずみと進め、世界的な芸術の動向のなかで日本の重要なアーティストの試みを位置づける。本研究はメディアアートの展開を外傷記憶という観点からより広い文脈で再評価する点に特徴がある。

4. 研究成果

国内での調査を展開しながら、海外の動向調査を並行して行ったが、調査の時期にダムタイプの個展がポンピドゥーセンター・メスで行われるなど、ダムタイプの回顧展も進展していた。本研究では1990年代に並行して行われたエイズに関わる芸術実践に焦点をあてて研究をするようになった。研究成果について、エイズ危機の時代の芸術に関する調査と、トラウマの再演をテーマとした作品群に関する海外調査とを分けて報告する。

エイズ危機の時代の芸術実践

2017年度には、1990年代のダムタイプの作品の資料やその周辺で展開したエイズをめぐる活動についての研究を、資料調査とインタビューを通して大きく進めることができ、その成果の一端をIAMASで行われたシンポジウムや、トークの中で発表を行うことができた。パフォーマーによる再演の実践をめぐる課題など、パフォーマーに具体的な話を聞きながら、充実した調査研究が進められた。また当時活動場所となっていたアーツケープに所蔵されていた資料の一部のデジタル化も進めた。こうした研究の進展は、森美術館の学芸員による資料展示企画の依頼もあり、展示プランを策定することと並行して行われることになった。

2018年度には、1980-90年代のエイズ危機の時代の美術の展開に関する資料整理と文献調査を行ってきたが、その研究成果を森美術館で「MAM006: クロニクル京都 1990s: ダイヤモンズ・アー・フォーエバー、アーツケープ、そして私は誰かと踊る」と題して、共同企画者として展示公表できた。ここでは、当時の活動に関わっていた当事者24名へのインタビュー調査を行い、その映像を編集し、行われた出来事についての解説を執筆した。あわせてトークのモデレーションと関連イベントの記録撮影などを行った。展示企画のテーマとして、アクティヴィズムを含む1990年代京都のアートシーンの展開だけでなく、クラブカルチャーでのドラッグクイーンのパフォーマンスにも焦点を行う展示内容となり、調査対象を広げることになった。本調査に関しては、森美術館による3ヶ月にわたる展示期間を通して研究成果を公表出来たため、多くの人々の反応や関心を得ることができ、とても有意義なものとなった。旧アーツケープ蔵の資料整理については、さらなる調査の可能性なども浮かびあがり、今後の研究活動として続けていく必要がある。また、アーカイブ展示を通じた、記憶のエナクトメントや過去の作品の再演といった課題についても、本事例を通して考察する手がかりにもなった。ドラッグや異装といった話題も含む、ジェンダーイメージの反復とズレを通じた「再演」、クラブカルチャーとダンスといったテーマについても考察を深めていく必要があるだろう。

ポンピドゥーセンター・メスでは、ダムタイプ展が開催されたが、この展覧会もパフォーマンス作品のインスタレーションでの再現という課題を通して、再演を異なる方法で捉えた試みだと言えるように思える。

2019年度までに、美術資料や記録映像のデジタル化やそれらのデジタルアーカイブ構築、資料展示の可能性、その活動の意義に関する国際的な文脈を踏まえた考察が進められた。2018年に森美術館で行われた展示企画についての記録集を6月に発刊し、2019年度の6月から7月にかけては、京都精華大学ギャラリーフールで、それらの資料や映像を組み替え、とりわけherstoryという視点で再構成した展示企画「ヒューマンライツ&リブ博物館 アーツケープ資料が語るハストリーズ」をディレクションした。herstoryとは女性からの視点の歴史を強調する造語であるが、ここではherをドラッグクイーンも含めた広い意味で捉えた。年度末には、これまでの研究実践に関する論考を、京都市立芸術大学芸術資源研究センター紀要『COMPOST』にて発表して、本研究の問題意識とプロセス、その成果について包括的に考察した。

2020年度はコロナ禍のため予定していた研究が十分に進まなかったが、日本の動向の調査に関して、2019年度中に行った資料展の記録集『ヒューマンライツ&リブ博物館 アーツケープ資料が語るハストリーズ』を編集・印刷した。まだデジタル化できていない資料も残っているが、インタビューの書き起こしを含む本記録集で、概ね当時の状況を整理し成果発表を公表することができたと言える。

さらにコロナ禍で、オンライン配信のイベントが頻繁に行われるようになるなかで、故古橋梯二氏の生誕祭の第5回目「Lovers60: Teiji Furuhashi Birthday Bush」(7月12日京都メトロ)が行われた。申請者は、クラブイベントのなかで、過去の記録映像や資料を編集して準備して、当日のDJの音楽にあわせて、ライブイベントで配信する試みに参加した。アーカイブ資料や映像をライブ配信で再活用するための知見を得ることができた。コロナ禍に行われたダムタイプの

無人公演記録『2020』とあわせてダムタイプによる自らの活動の回顧や再演の持つ意味の考察に関しては、今後の課題とする。

2021年度は引き続き「Lovers61」に参加し、プレオープニングでDJLaLa氏のレクイエムやリミックスした音源に合わせてAIDSに関わる芸術作品や、当時の映像フーテージを編集して当時の文化状況を偲んだ。広島芸術学会にて、上記の研究を踏まえて、ダムタイプの「pH」プロジェクトに即した研究発表を行うことで、冷戦後のポストヒストリー、ポストヒロシマ、ポストヒューマンという観点から作品の歴史的意義について改めて整理し直した。

このように、AIDS危機の時代の芸術実践には、感染症による死に対する哀悼や喪の儀式があり、それを資料とともに語り直し、その時代の表現を再演することは、外傷のエナクトメントを促すことにつながる。こうしたアーカイブ資料の編纂には、外傷のエナクトを一時的で創造的な共有空間が生まれ、未知の観客を巻き込んだかたちで記憶やケアの技法の継承にもつながることが実践的に明らかになった。以下が主な出版物である。

・椿玲子・石谷治寛(2018)「MAMリサーチ006:クロニクル京都-ダイヤモンド・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る」森美術館

・石谷治寛・山田創平(監修)(2019)「ヒューマンライツ&リブ博物館-アートスケープ資料が語るハストリーズ」ディレクション」京都精華大学ギャラリーフロール

・石谷治寛「AIDS危機の時代のクラブカルチャーと芸術実践のアーカイブー視点・過程・展示」芸術資源研究センター紀要COMPOSTO1, 2020年3月, pp. 10-40

外傷の再演をめぐる国際的な芸術動向に関する調査

2017年度は、パフォーマンス的な要素をもった現代アートの流れを再検証するなかで、外傷の再演という課題を深めることができた。1970年代以降に活躍をはじめたアーティストの再演の方法について検証しながら、後続の美術家による現代的なアプローチを再検討した。とりわけカッセルとアテネで開催されたドクメンタ14の視察は有意義であった。外傷記憶という主題を、17世紀の奴隷貿易、戦争や空襲、現代の移民問題、資源採掘や労働、精神医療、拷問、警察のアーカイブといった多様な欧州の歴史的な文脈と個別な都市の歴史のなかで考察するものだった。カッセルという都市の欧州の歴史のなかでの位置づけと、アテネの近代化や、大戦以後の民主化のプロセス、新世界秩序のなかでのグローバル・サウスの役割の再考、歴史遺産返還問題など、様々なトピックについて改めて認識した。さらにバルセロナ現代美術館での中東の紛争を背景にしたアーカイブを用いたアクラム・ザアタリの個展やフォレンジック・アーキテクチャー、マドリードのレイナ・ソフィア美術館での1980年代以降のコレクションやアーカイブの調査を行った。マドリードではAnarchivo Sidaと題されたエイズ危機の時代のスペイン語圏のアーティストの動向をまとめた資料展が行われ、1980年代以降のアートと政治やHIVに関わるアート活動についての調査を行うことができた。

2018年度は、フランス、ベルギーなどで、記憶研究の取り組みと、外傷記憶のパフォーマンス的な再演をテーマにする美術家の動向についてリサーチした。とりわけクルド出身のヒワ・Kの試みは、メソポタミア文化から現在のクルド人のアイデンティティまで深い歴史的な射程の中で紛争による外傷後の記憶のエナクトメントをテーマにしていると言える。またメラニー・ボナジョは、エコ・セクシュアリティの観点から、喪失した自然との関係を捉え直そうとする試みを行っており、セラピューティックな発想も含めてより深い考察に繋げていくことができるだろう。また森美術館での個展にあわせて編集された美術手帖に、外傷記憶を主題にする美術家として塩田千春に関する論考を発表することができた。国際的な美術の動向に関する調査としては、とりわけピエール・ユイグがディレクターを務めた岡山芸術交流についてのレビューを美術手帖のウェブ版に発表したのが、あわせてフィリップ・パレーノ、カミーユ・アンロらフランスの美術家による展覧会と文献調査を行うことができ、テクノロジーによる自然の制御とその不可能性という観点で創作を行う美術家に関する知見を深めることができた。

さらにヴェネチア・ビエンナーレやミュンヘンなどの欧州の美術状況の調査では、リュック・ダイヤモンド、ミリアム・カーン、マリア・ラスニックらの外傷記憶を主題とする画家の個展を通して、現代の絵画表現の傾向について知見を深めることができた。さらにヨーロッパで2年に1回異なる都市で行われるマニフェスタ12(シチリアパレルモで開催)では、国際的に移民や植物が移動・移植(マイグレーション)して多層的なモザイクを形成してきた都市の歴史とエコロジーを既存の建築物や植物園を通して浮かび上がらせた。

他方で、北米の調査では、LGBTやエイズ危機の時代のトラウマに関する文献調査を行い、クリスチャン・マークレーやJRなど、文化的差異に基づく外傷記憶を超えた群衆の経験を通して、コミュニティや都市の記憶をつなげる近年のメディア実践についての知見を得た。

とりわけエイズ危機の時代のアート・アクティビズムの調査や展示実践が具体化したために、この方面の研究は成果公表とともに著しく進展させることができた。また、研究課題として焦点を

あわせていたフランスの美術家の試みについての調査も、前年度までに調査を行った「ドクメンタ 14」に関する調査報告なども研究会で発表を行った。

2019 年度は、前半に展示企画のディレクションを行ったため国際的な動向に関する調査研究を進められなかったが、ジョン・ジョナスやピエール・ユイグなど自然環境と人間や動物の関係を、パフォーマンス・映像・インスタレーションで再演する美術家の展覧会のレビューやインタビューの機会を得て、改めて国際的な動向についての研究を深めた。2020 年の 2 月末から 3 月初旬にかけてアムステルダムを中心にオランダの都市とアーカイブやメディアアートの保存に関する調査を行なったが、その一端を京都市立芸術大学芸術資源研究センター紀要にて公表することができ、同時代の京都とアムステルダムを比較して考える視点を獲得することができた。

2020 年度は、コロナ禍でのオンライン授業への切り替えなど、様々な対応に追われるなか、とりわけ海外調査の予定が行えなかった。その代わりに、NAS などを導入し、過去にデジタル化した資料や映像などの整理を行うことができたのは成果であり、今後のライブ配信などにこれまでデジタル化した資料を再活用するためのワークフローを模索することができたのは成果だと言える。

2021 年度も引き続き、コロナ禍の状況で、いくつか調査を行うべき展覧会などが行われているが、断念せざるを得なかった。職場の異動も含めて研究体制を広島で再構築することにフォーカスしながら、被曝建物をはじめとした広島市内の都市の歴史的な変化についての調査・視察を積極的に行うとともに、広島文化芸術の歴史を外傷記憶の再演という観点で見直してみた。被爆者の絵の展開や、基町高校による被爆者証言に基づいた絵画制作など興味深い事例が多いことは改めて考えることができたが、特定の活動や作家にフォーカスするよりも、より広い文化芸術の歴史、埋め立て・再開発による自然環境の破壊と再構築のなかで、芸術による外傷記憶の再演やトラウマ後の成長という課題にアプローチする必要性を認識した。ヒロシマという大きな難問にどのように取り組むべきかという課題に対して、広島状況をリサーチすることに注力したため、予定だったこれまでの研究の総括の作業が遅れている。並行して取り組むことによって本研究の更なる飛躍のための調査を行っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 72
2. 論文標題 「ピエール・ユイグ・インタビュー」（聞き手・翻訳）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 72
2. 論文標題 展評「世界は燃えている」（パレ・ド・トーキョー、パリ）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 178-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 1
2. 論文標題 5つの部屋の憂鬱	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JOAN JONAS in KYOTO 2019-2020	6. 最初と最後の頁 102-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 1
2. 論文標題 スーパーオーガニズムは、電気仕掛けの人間の夢を見るか？ 石谷治寛評「岡山芸術交流2019『IF THE SNAKE もし蛇が』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術手帖Review2019	6. 最初と最後の頁 423-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 1
2. 論文標題 「オルタナティブスペース」「美術ジャーナリズムの役割」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学の事典	6. 最初と最後の頁 324-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 2
2. 論文標題 アムステルダムの都市とアーカイブに関するメモランダム2020	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Compost	6. 最初と最後の頁 126-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 5
2. 論文標題 色盲者の幽霊船を漕ぎ出す 馬場靖人『色盲 と近代 十九世紀における色彩秩序の再編成』書評	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 216-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 8月号
2. 論文標題 トラウマが移送される母胎の海へ(特集: 塩田千春)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 104-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 第一巻
2. 論文標題 AIDS危機の時代のクラブカルチャーと芸術実践のアーカイブ 視点・過程・展示	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学紀要COMPOST	6. 最初と最後の頁 2-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畠中実、金子智太郎、石谷治寛	4. 巻 2019年3月
2. 論文標題 メディアから考えるアートの残し方 展示、再演、再制作	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アーツスケープ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 第9巻
2. 論文標題 歴史と踊る 再演の想像力をめぐる三つのケース	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報科学芸術大学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石谷治寛	4. 巻 第9巻
2. 論文標題 《pH》再演のためのアーカイブ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報科学芸術大学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永井隆則, 深尾茅奈美, 亀田晃輔, 鈴木慈子, 石谷治寛
2. 発表標題 若手シンポジウム 『印象主義の現在』（コメンテーター）
3. 学会等名 日仏美術学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椿玲子、石谷治寛
2. 発表標題 MAMリサーチ006: クロニクル京都1990s ダイヤモンド・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る
3. 学会等名 森美術館
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 石谷治寛、三輪健仁、赤羽亨
2. 発表標題 「再演、再制作、再展示」
3. 学会等名 シンポジウムおおがきビエンナーレ2017 新しい時代 メディア・アート研究事始め
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松隈洋、渡部葉子、石谷治寛
2. 発表標題 「資料の読み書きと教育」
3. 学会等名 シンポジウムおおがきビエンナーレ2017 新しい時代 メディア・アート研究事始め
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ブブ・ド・ラ・マドレーヌ,石谷治寛
2. 発表標題 たたかう、アート！ Vol.3 『第五回講座 エイズ危機の時代のアートとそのアーカイブ化 これまでの経緯と課題』
3. 学会等名 Cafe LGBT+, 京都市立芸術大学芸術資源研究センター（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 石谷治寛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 自費出版	5. 総ページ数 150
3. 書名 ヒューマンライツ&リブ博物館 アートスケープ資料が語るハストリーズ	

1. 著者名 椿玲子・石谷治寛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森美術館	5. 総ページ数 98頁
3. 書名 『MAMリサーチ006：クロニクル京都 - ダイヤモンズ・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>スーパーオーガニズムは、電気仕掛けの人間の夢を見るか？「岡山芸術交流2019」レビュー https://bijutsutecho.com/magazine/insight/20850 京都市立芸術大学芸術資源研究センターニュースレター 5号 http://www.kcua.ac.jp/arc/wp/wp-content/uploads/2019/04/ca306c61a887754fa9d1ef7dd71144d2.pdf 京都市立芸術大学芸術資源研究センター http://www.kcua.ac.jp/arc/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------